Vol．67－No．03　　2015 年 7 月

阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

道師

阿佐ヶ谷教会の夏は毎年７月初めに行われるワークデーから始まります。教会の内外を皆で清掃し、神の家を整え、これから迎える暑い夏に備えます。そして信友会は７月 24 日から三鷹のエピファニー館で修養会が始まります。
今年は主任牧師がいませんがその分堀川伝道師にさまざまな役割を担っていただくことになり、本当に感謝です。参加者が年々少なくなってきていますが、参加できない兄弟とともに多くの収穫をわかちあい、この夏を乗り越えていきたいと思っています。　（ＹＯ記）

『聖霊行伝をたどる－使徒言行録の学び－第22章』　堀川　樹 伝道師

パウロがギリシャからエルサレムへ戻ることについては、エルサレム民衆の反感が強くあるので滞在した町々の信徒から引き止められました。第２０章でのエフェソの長老たちの反対に対し、パウロは、投獄と苦難が予想されるが神の恵みの福音を証することが出来るなら自分の命も惜しくはないと言い、キリストの愛の故にエルサレムに戻ろうとしたのです。そして、エルサレムでイエスの弟で最長老のヤコブに異邦人伝道の成果を報告しました。そして神殿に入ったところ、アジアやギリシャでパウロの宣教の妨害を繰り返したユダヤ人たちから、「ギリシャ人を神殿に入れて汚した」と言って取り押さえられ殺されそうになったのです。ローマ軍の千人隊長がこの騒ぎを聞きつけてパウロを捕らえたが、騒々しい中でパウロの罪状を知ることが出来ず兵営に連れて行こうとします。パウロはギリシャ語で千人隊長に語りかけ、自分がキリキア州タルソスの市民のユダヤ人であることを伝え、民衆に弁明する機会を願い出て許されます。パウロは、ユダヤ人が主イエスの福音により救われることを願って弁明したのです。

民衆が静まったところで、パウロは階段の上からヘブライ語で語りかけます。

パウロの民衆への弁明

第２２章からこの書簡の最後まで、パウロは自らの弁明を繰り返します。この章の民衆への弁明、２３章では最高法院の議員に、２４章ではカエサリアでローマ総督フェリックスと後任のフェストゥスに弁明、２５章では皇帝への上訴を行い、２６章ではユダヤ人に引き渡され、ユダヤの王ヘロデ・アグリッパ２世にキリストの証しとしての弁明を行っています。パウロがローマの市民権を持っていたので、鞭うたれることなく弁明の機会を与えられローマまで護送されたのです。

私たちはどうでしょうか。パウロはフィリピの信徒への手紙１章７節で、「福音を弁明し立証する」と言っています。私たちは、キリスト者と言うことで多く人々から質問を受ける機会があります。各自自分の生い立ちなどからキリスト者になった経緯などを話さなければならないことが多いのです。そんな時に備えてキリストとの出会いなどを説明できる準備をしていたいものです。

（写真は左から司会の中村剛健兄　堀川樹先生、書記の玉澤武之兄）

パウロがヘブライ語で話すのを聞き、民衆はますます静かになります。パウロが自分の出自を「キリキア州タルソスの生まれのユダヤ人で、学問はエルサレムでラビのガマリエルの下で先祖の律法など厳しい教育を受け、皆さんと同じく熱心に神に仕えました」。パウロはこの人たちと変わらない者であると言います。そして、「この道（キリスト教）を迫害し、男女を問わず縛り上げて投獄し殺すこともした」と告白します。タスソスは、現在のトルコの地中海に面したギリシャ文化の色濃い港町であり、先生のガマリエルは、ユダヤの著名なラビの一人です。パウロは、エルサレムでも第１級のファリサイ派の人材であったことは知れ渡っていたでしょう。５節では、パウロは、長老たちからキリスト者の迫害のための手紙を預かりダマスコに向かいます。行程２３０キロ、かなりの遠方ですがキリスト者の迫害は執拗に行われ、その中でもパウロは熱心であったのです。

パウロの回心

６節からは、パウロの回心の告白になります。「旅を続けてダマスコに近づいた時のこと、突然天から強い光が私の周りを照らし、私は地面に倒れ目が見えなくなります。そして、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』という声を聞いたのです。『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、『わたしはあなたが迫害しているナザレのイエスである』と答えました。パウロはイエスの声を聞いた時に回心をして、「主よ」と答えたのです。救い主としてのイエスに従う決心をしたのです。　『主よ、どうしたらよいですか』と申しますと、『立ち上がってダマスコへ行け、しなければならないことはすべてそこで知らせる』と言われました。ダマスコで、ユダヤ人の中で律法に従って生活し、信仰深い人であるアナニアの家に行き、目が見えるようになりました。そして、アナニアから「私たちの先祖の神は、あなたを選びました。それは、御心を悟らせ、あの正しい方に会わせて、その口からの声を聞かせるためです。あなたは、見聞きしたことについて、すべての人に対してその方の証人となる者だからです。今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい。その方の名を唱え、洗礼を受けて罪を洗い清めなさい」という神の命令を聞きます。そしてアナニアから洗礼を受けるのです。ここでは、主は先ずダマスコへ行くことを命じ、そこで次のステップを示すと言います。パウロは神さまとの出会いを通して自分がいかに変えられたかを話そうとしています。神はいつも多くを示さず、一歩一歩、道を示すのです。私たちも神さまの導きをひとつひとつ受けつつ信仰生活を進めるべきなのです。

１４節ではアナニアの口を通してパウロが福音を語る者に選ばれた事を示しています。熱心な迫害者が神との個人的な出会いを通して、福音を語る者へと変えられたことを語ったのです。１４節でアナニアは、三つの動詞、「悟らせる、会わせる・見る、聞かせる」を用いて語っています。ここでは、神が願っていることを悟らせること、主イエスを見ること、主イエスの言葉を聞かせることが大切だと言っています。自分の願いを適えることは信仰ではなく、神さまの御意志を受けて自分のすべてを調和させること、そして、御心が天になるごとく地にもなさせたまえと祈ることが信仰なのです。

パウロ、異邦人のための宣教者となる

１７節からは、エルサレムの神殿での体験を語ります。神殿で祈っているとき、我を忘れた状態になり主にお会いしたと言います。そして、主は『急げ。すぐにエルサレムから出てゆけ。わたしについてあなたが証しすることを、人々が受け入れないからである』。パウロは主に、以前の自身の行動について「主よ、わたしが会堂から会堂へと回って、あなたを信じる者を投獄したり、鞭で打ちたたいたりしたことを、この人々は知っています。また、あなたの証人ステファノの血が流されたとき、わたしもその場にいてそれに賛成し、彼を殺す者たちの上着の番もしたのです。」と言います。パウロは、熱心な迫害者であり、ステファノの死に関与したことを告白しました。エルサレムではよく知られている存在であるので出て行く必要はないと反論します。これに対して神さまは『行け、わたしはあなたを、遠く異邦人のため遣わすのだ』と命じます。神は、初めからパウロを異邦人への伝道者として選んでいたのです。

ここまでのパウロの弁明を聞いた民衆は騒ぎ出し、「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない」と言います。ユダヤ人はパウロが異邦人のための伝道者になることでユダヤ人と異邦人の間に関係ができることを許すことが出来なかったので騒動は激しくなり上着を投げつけ、砂埃を空中にまき散らすほどだったのです。千人隊長は、パウロを兵営に入れることを命じ、民衆のパウロへの怒りを理解するため鞭で打ちたたいて調べるように命じます。ローマ兵は、ヘブライ語によるパウロの民衆への弁明は、理解できなかったのです。

パウロを鞭で打つため両手を広げて縛ると、パウロはそばにいた百人隊長にギリシャ語で「ローマ帝国の市民権を持つ者を、裁判にかけずに鞭で打って良いのか」と言いました。百人隊長は千人隊長に「どうしますか、あの男はローマ帝国の市民です」と言います。これを聞いた千人隊長はパウロに、「あなたはローマ帝国の市民なのか」と尋ねて確認し、「わたしは、多額の金を出してこの市民権を得た」と言うと、パウロは「わたしは生まれながらのローマ帝国の市民です」と答えます。

パウロはタルソスの生まれで、先祖がローマ帝国への貢献などで市民権を持っていたと想定されます。辺境の地でローマの市民権を持つ者は少なく、その権利を得るためには多額の金が必要であったと思われます。パウロがローマ帝国の市民権を持っていたことは、異邦人伝道でアジア、ギリシャにまで至る伝道旅行のための移動に大いに役立ったと思われます。また、パウロが育ったタルソスはヘレニズムの文明圏で、パウロはその文明の素養を身に着けており、ギリシャ文化を理解した上でイエスの福音を伝えるのに役立ちました。また、ガマリエルに育まれたユダヤ教の聖書や律法理解を通してデアスポラのユダヤ人への福音宣教にも役立ったことでしょう。このようにパウロの優れたタレント、迫害者から異邦人宣教の器への変換などが多いに生かされたのです。一方、神はパウロを異邦人伝道の宣教者として生まれる前から選んでいたと言うのです。

３０節からは、パウロはいよいよ弁明のため、ユダヤの長老と最高法院（サンヘドリン）に出廷することになります。千人隊長は、パウロの罪状を確認するため、縄を解いて最高法院で長老たちの前に立たせます。次章でもパウロの信じる前の立場が生かされ、弁明を続けるのです。生まれる前、信じる前からの神の恵みの選びはあるのです。ですから安心して、私たちもパウロのようにいつでも弁明できるように祈りつつ、主イエスとの交わりの道を歩んでいきましょう。　　（文責：玉澤武之）

♫　～信友会の夏の行事～　　♫

・7 月 24 日～25 日　－信友会　修養会のご案内―
テーマ：「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます」

・8 月 23 日　－信友会、地の塩会合同例会－
信友会担当：「高円寺風うどん」, 地の塩会担当：プログラム企画